「セカンドライフサポート」の理念

セカンドライフサポート

「セカンドライフサポート」の理念

――地域循環型社会の実現に向けて――

安心して暮らし、楽しく老いる

このたびは私どもの「セカンドライフサポート」にお問い合わせいただきましたこと、お礼申し上げます。

口幅ったいいい方で恐縮ですが「セカンドライフサポート」の理念についてお話しさせていただきます。

ここ笛吹市は五月から六月にかけて桜と桃の花が咲き、お互いに美しさを競い合います。少し足を伸ばせば河口湖から絶景の富士山を眺めることもできます。

まさに中国の詩人・陶淵明がいった「桃源郷」もかくやと思わせる日本有数の景勝地でございます。

それも東京・新宿から電車で一時間半、高速道路を使えば一時間あまりで来られます。近い将来、リニアモーターカーが走るようになれば甲府ー東京間は瞬きする間に着いてしまいます。

私どもはこの地を何度も訪れて、地域の人たちや介護関係者、市の福祉担当者の皆さんと何度も話し合いを持ち、「セカンドライフサポート」が考える〝安心して暮らし、楽しく老いて

いける理想郷〟をここにつくろうと思い定めたのです。

どの年代の方でも歓迎ですが、特に、定年を迎えられ，第二の人生を美しい自然の中でゆったりと暮らしたいとお考えの方たちには喜んでいただけるものと思っております。

実は、こうした施設をつくろうと思ったきっかけになった一冊の本があります。楡周平さんという作家が書かれた『プラチナタウン』です。

総合商社の部長だった山崎鉄郎という男が、ひょんなことから膨大な負債を抱えた岩手県の緑原町という過疎地帯の町長を引き受けることになってしまいました。

様々な困難の末、山崎は財政再建のために、老人向けのテーマパークタウンを誘致することを決断します。

そして町議歴五十年、八十三歳の町議会のボスに向かって、町の財政を立て直すためにこう説きます。

「この町の豊かな自然環境の中で、現役を引退した後の余生を何の心配もなく楽しく暮らせる環境を整えたらどうでしょう。人間は必ず老いるものです。誰でも体が思うように動かなくなった時のことを考えれば、不安に駆られるものです」

そうしてこの町の事業コンセプトを「老人の定住型テーマパーク」と決め、「豊かな自然の中で、四季の移ろいを肌で感じながら野山で遊ぶも良し、畑で作物を作るも良し、釣りや狩猟、陶芸をするも良し、プールもあればディスコもある。ゴルフだって都会とは比較にならないほど安い料金でできる。医療施設にしたって、最先端の検査機器を備えた病院がある」施設づくりに

邁進していきます。

子どもや孫が遊びに来ても余裕がある2LDKの住まい（3～4階建てのマンションタイプ）。その事業を請け負った民間企業の社員たちも定年後はそこへ入りたいという希望者が多く、企業側も福利厚生の一環としてそこを買い上げます。

福祉関係の若者たちも移住してきて人口も増え、町は活況を取り戻すという話ですが、これがヒントになり、こうしたコミュニティを山梨県・笛吹市でやってみようと決断いたしました。

私が山梨県笛吹市を選んだ理由

実は私も二十年ほど前になりますが、東京から遠く離れた町で田舎暮らしをしようと家を探したことがありました。

何日かホテルに泊まって、多くの人に話を聞いて回りました。ですが、ある夜、ホテルに来てもらったマッサージ師さんから、「お客さんはどんな用で来ているのか」と聞かれ、「ここに住もうと思って家を探している」と話しました。

すると、そのマッサージ師さんから、「ここは他所（よそ）から来た人を受け入れない町だから、やめたほうがいい」といわれてしまったのです。

たしかにその町は、余所者（よそもの）どころか周辺部の人さえ受け入れない閉鎖的なところのようでしたので、断念しました。

快適に暮らしていくためにはその地域のコミュニティの人たちと、いいコミュニケーションをとれるかどうかが、大きな要素になります。

今の私なら、移った先の地域コミュニティと人間関係を構築しようという覚悟のない人は、失敗するからやめたほうがいいといえますが、当時の私にはその覚悟がなかったのです。

政府の調査によると、東京在住の50代の男性の34・2％、同世代の女性の24・2％が地方への移住を希望しているそうです。

若いうちは都会で仕事をし、遊び、年をとったら自然の豊かなところでノンビリ暮らしたいというのは、人間の自然な感覚ではないでしょうか。

日々、小川のせせらぎや鳥のさえずりを聞いて目が覚める。家庭菜園の新鮮な野菜を食べ、緑豊かなところで本を読み、釣りをしたりして、悠々自適な生活を送る。

健康で元気なときの田舎暮らしというのは、それは非常に楽しいと思います。

田舎暮らしに欠かせないものは車です。笛吹市には10分から20分も走ればいくつものゴルフ場があります。河口湖もひとっ走り。八ヶ岳の裾野の町は夏でもクーラーいらずで過ごせます。

今ではインターネットを使えれば、世界中のニュースを居ながらにして知ることができます。在宅で仕事をすることも可能です。

ゴミゴミした都会の喧噪を離れて、田舎暮らしであなたの第二の人生を謳歌してみませんか。

多くの田舎暮らしのパンフレットにはそう書いてあるはずです。

ですが、田舎の暮らしにはいい面もありますが、マイナスの面もあります。まず、あなたが

年をとったり障害を抱えて車を運転できなくなったとしたら、このときから田舎暮らしは不便極まりない生活にガラッと様変わりします。

美しく豊かな自然が、ただ眺めるだけのものになりかねません。田舎の場合、その対象となるべき高齢者が少ないために、そうした交通や移動のインフラ整備がなされていないところがまだまだ多くあります。

田舎暮らしをすすめている地方公共団体というのは、元気で車が運転できる健康な高齢者を誘致したいわけですから、その人たちが車を運転できなくなったときのためのインフラを先行してつくることはしません。

私どもの物件の購入を考えてくださっている方の多くは、健康に自信を持ち、アクティブに田舎暮らしを楽しもうと考えていると思います。

体が弱ってきたらその時に考えるとお思いかもしれません。ですが、残念なことに人間はいつ、どんな形で肉体が衰え、介護士や看護師のお世話になるか分からないのです。

私が「セカンドライフサポート」事業の最初に笛吹の地を選んだのは、そこに一番の理由がありました。

孤独死をゼロにする「緊急通報」

私は「阪神淡路大震災」が起きた後、多くの障害を抱えたお年寄りたちが、助けを呼べずに

亡くなったことを知りました。

そうした悲劇が起こらないようにできないかと考えた末に、独自の緊急通報システムを開発しました。

独居のお年寄りに何かあったとき、腕につけている腕時計型のボタンを押すと瞬時に消防署につながり、救急車が駆けつけてくれるというシステムです。

このシステムをよりよいものにするために協力してくれたのが、旧八代町（現在は笛吹市に合併）の社会福祉協議会に籍を置いていた中村悦子さん（その後、笛吹市社会福祉協議会事務局長）だったのです。

中村さんはこういいます。「八代社協では、より豊かな老後を過ごしてもらいたいというニーズ解決の方向で、給食サービスに限らず、高齢者・障害者福祉というものをよりよいものにしようと考えてやって来ました」。「サービスは高く、負担は軽く」を目標に、地域の支え合い意識を高め、そのためには必ず地域の支え手であるボランティアの参画を得ていくことを定着させるために力を注いできた方でした。

中村さんには、私どもが開発した緊急通報システムの改良実験に2年間も協力していただき、消防につなげる誤報のないシステムをつくり上げることができました。

この腕時計型緊急通報システムは現在、20自治体、1万3000台が、独居の人たちの命を守るために稼働しています。

中村さんはその後、独立して自ら「特定非営利活動法人地域福祉サポート笛吹」を立ち上げ

られました。

設立趣意書にはこうあります。

「私たちは、地域福祉活動の成功のためには、多くのボランティアや地域の方々の支援と理解が重要なことを学びました。このため、私たち（介護支援専門員、介護福祉士、障害者相談支援員、ホームヘルパー、社会福祉主事、看護師などの福祉・医療関係者）は、この経験をもとに、要援護者の生活を支えるボランティアの方々との繋がりを大切にしながら、自治体や社会福祉協議会及び関係団体と協働して、介護サービスや障がい児・者サービスを展開するとともに、各種制度の狭間にある問題解決のためのサービスを研究・開発し、実践していきます」

中村さんには地域の福祉活動を数十年やりながら構築してきた「高齢者の循環型社会」という考え方があります。

それは、健康な現世代の地域協力者が、支援が必要になった前世代の地域協力者を支援し、介護施設・福祉事業・地域協力活動を包括的に運営している「地域福祉サポート笛吹」のようなところが介護サービスを提供します。

現世代が支援を必要とするようになったら、次世代の地域協力者が支援し「地域福祉サポート笛吹」が介護サービスを提供する。

昔「向こう三軒両隣」という言葉があったように、地域の人たちが協力し合って、このように循環していくことができれば、そのコミュニティは永久に続くことになります。

循環型社会こそ日本の理想型

私もこの型が、少子高齢化が進む日本では理想ではないかと思っています。

しかし、中村さんが循環型社会を構築しているときは、地域の高齢化が進行していたからよかったのですが、その後、残念なことに高齢者がさらに高齢化するだけで、次の高齢者の世代がいなくなってきているのが現状です。

若年層が都会へ出て行ってしまったために人口の空洞化が起きてしまっているからです。そうすると、作り上げた地域協力活動による高齢者循環型社会は永続できるのでしょうか。

高齢者がどんどん増えていっても、その次の世代が減ってしまえば、循環はどこかで止まってしまいます。

20年後には８００の地方都市が限界集落化するという調査がありましたが、その中には東京・池袋も入っていることが大きな話題になりました。

笛吹市も、あと5年、10年後にはそうした事態に陥らないとも限らないのです。

こう書くと皆さん心配になりますよね。

ご安心いただく前に、現在の高齢化社会に対する国や自治体の取り組みを見てみましょう。

今、大都市の抱えている最大の問題はベビーブーマーと呼ばれている昭和23年以降の団塊世代２５０万人が高齢者になって、その人たちが10年後には後期高齢者になることです。

この２５０万人が後期高齢者になったときの受け皿になる介護インフラは、今のままでは足

りるはずがありません。

厚労省は今後も介護施設を増やすという意思がまったくないだけではなく、これまで20万床あった療養型病床を既に7万床にまで減らしています。

さらにそれをゼロにするといっているのです。本当は厚労省がゼロにするといったとき、自民党内の政治決着で10万床で手を打ったはずなのですが、結局、反故（ほご）にされてしまっています。

現時点で全国の入所型の施設は全部合わせて148万床です。しかし要介護3以上で現在入居している人と、入居を希望している人を含めた総数は207万人ですから、既に50万人以上もあぶれてしまっているわけです。

そこに250万人が加わればどうなるかは、いうまでもないでしょう。

さらに政府は、膨らみ続ける介護費用を何とかしようと、介護保険の見直しの議論を本格化させています。

制度が始まった2000年度は3・6兆円だった総費用は、今年度当初の予算ベースで10・4兆円と3倍になっています。

しかも、65歳以上の高齢者が払う保険料は全国平均で2911円から5514円にまで増加しているにもかかわらずです。

厚労省の試算では、団塊の世代が全員75歳、後期高齢者になる2025年には、総費用が20兆円になるとしています。保険料も8200円程度まで上がるそうです。

すでに要支援の人向けの訪問介護は見直されていて、2015年度から2017年度にかけて段

階的に市町村の事業に移行しています。これからは各市町村がどれぐらいの担い手を確保できるかで、移行後のサービスに差が出る可能性もあり、移住するときにしっかりチェックしないといけません。

今でも家族の介護を理由に仕事を辞める「介護離職」が年間10万人といわれていますが、これでは、今後さらに増えることになりかねません。

老老介護の悲劇をなくすために

さらに深刻なのは「老老介護」に疲れ果て、殺人まで引き起こすケースが増えていることです。

２０１５年７月３日のＮＨＫスペシャルは『私は家族を殺した〝介護殺人〟当事者たちの告白』を放送しました。ここでＪ・ＣＡＳＴニュースで元木昌彦氏（元講談社『週刊現代』編集長）が書いたものを紹介しておきます。

「重いテーマだったが、Ｎスペならではのいい番組であった。だが、当事者たちの追い詰められた心境や、老老介護の難しさは身につまされたが、自分の身に起こったとき、どうすれば『介護殺人』に至らないようにできるのかがよくわからない。そこが物足りなかった。

『週刊ポスト』（７／15号）はこうしたテーマを時折取り上げているが、今週もＮスペをベースに『今すべきこと、考えておくべきこと』という特集をしている。

だがここでも、こうした悲劇をなくすための十分な方策を提示できてはいない。それだけ難

しいということだが。

『ここ数年の間に「介護殺人」は頻発している。5月10日には、東京・町田市で87歳の妻が92歳の夫を絞殺した後、首を吊って自殺した。夫は数年前から認知症の症状が現われ始め、体力が落ちて車椅子なしでは動けない状態だった。（中略）

夫がようやく介護施設への入所に同意し、手続きがほぼ済んだ矢先に起きた事件だ。妻の遺書には夫に宛てたこんな言葉があった。『一緒にあの世へ行きましょう。じいじ。苦しかったよね。大変だったよね。かんにん。ばあばも一緒になるからね』」（週刊ポスト）

同じ年の1月17日、千葉・野田市で77歳の妻が72歳の夫を刺殺した事件では、介護施設への入所費用の捻出が引き金となったという。

『夫婦は息子家族と同居していたが、夫を介護施設に入れるための費用がなく、自宅を売却しなければならないと考えていた。そのことで息子夫婦との仲が悪化したことも、妻を追い詰めたようだ』（大手紙記者）

日本福祉大学の湯原悦子准教授は、介護殺人の原因は、介護疲れと将来への悲観の二つに大別されるという。

『埼玉・小川町や栃木・那須町の事件などは、典型的な介護疲れによるものだ。配偶者の気持ちを汲んで施設に入所させず、自らが介護を一身に背負うことになった。

老老介護なので、自分自身の体調もおもわしくなくなる。仲のよい夫婦であればあるほど、相手を不憫に思い、行き詰まって殺害に至るというパターンは多い』

老後破産も増えている。老後破産とは高齢者が貧困のために破産状態に追い込まれることで、今全国で約２００万人以上がこの状態にあるといわれているそうである。

湯原氏がこう続ける。

『高齢者の場合、たとえお金を持っていても、それが減ることに対して強い恐怖心を抱いてしまう。「この先、生活が困窮するかもしれない」という不安から、介護サービスの利用を控えるケースもあるのです』

「長生き」が祝福される社会へ

そうした高齢者たちをさらに追い込むのは『働かない子供』の存在だ。職を失った息子や娘が実家に寄生し、親の年金を頼りに生活する。親の老後資金を食いつぶして共倒れになってしまう『親子老後破産』が起きるのも近年の特徴のようだ。

東京・大田区の事件では、無職だった同居中の息子の出費も、殺害の動機の一つになった。

『親がまだ現役の間は子供が働かなくても何とかなりますが、親がリタイヤした後は貯金や年金を食いつぶすばかりで、親子で貧困に陥りやすい。

しかもそのような子供には介護能力もないから、親が弱っていってもどうすることもできない』（湯原氏）

老後破産は将来の悲観に直結し、最悪の場合、介護殺人にまで至ってしまう深刻なものなの

だ。ではどうすればいいのか。

『老後破産に陥ってしまったら、ためらうことなく生活保護を受けることです。生活保護を受給できれば介護保険料もタダになり、自己負担はゼロですから』（同）

年金生活の親と非正規雇用の子供が同居している場合、世帯分離という方法で生活保護を分けてもらうこともできるそうだから、まずは相談窓口に連絡することだ。

しかし、配偶者が認知症になり、それでも要介護1か2程度にしか認定されなければ介護サービスが受けられず、配偶者が認知症患者の面倒を見なくてはいけない。そこに悲劇が生まれるのである。

湯原氏がいうように社会のサポート体制が必要だと、私も考える。

『心中事件の場合、介護者がうつであることが多い。周囲が早めに気づいてサポートするだけで介護殺人はかなり減少すると思います』（同）

週刊ポストの記事は『将来、自分が介護殺人を招かないためにも、今から老後破産を回避するべく、老後に備えることが必須である』と結ぶ。だが、できた当初は歓迎された介護制度もどんどん改変され、使う側にとってありがたさがなくなってきた。

特別養護老人ホームへ入れようと思っても、待っている人が多すぎて入るのは至難である。先ほどの相談窓口へ行っても、デイサービスなどを利用しなさい、近所の人たちに相談して助けてもらいなさい程度しかアドバイスしてくれず、門前払いされるケースが多いのではないか。

こうした問題を国会で論じ合ってもらいたいが、麻生太郎副総理などは「年寄りは長生きす

るな」といわんばかりの暴言を繰り返し、メディアはそれを大声で批判することさえしない。

こうした悲劇はこれからも繰り返す。親も子どもも元気で働けるうちはいいが、どちらかが病気や認知症にでもなったら、たちまち小さな幸せさえ崩壊してしまう。それがこの国の実態である」（以上、元木昌彦氏）

日本版ＣＣＲＣ構想の問題点

増え続ける介護費用と、こうした〝悲劇〟を減らそうと政府が考えたのが日本版ＣＣＲＣ（Continuing Care Retirement Community）構想です。

ＣＣＲＣとは、現在アメリカで普及している高齢者コミュニティのことで、リタイア後、健康なうちに入居し、その後介護が必要な状態になっても同じ場所で最期まで過ごせるというものです。政府は、これを参考にした日本版ＣＣＲＣを普及させて、高齢者の地方移住を促進し、地方創生につなげたいというのです。

私は、これができればそれなりの数の高齢者が地方に移住するということになると思います。そういう前提があれば、地方公共団体は当然地域活性化策として、移住してくる人に見合った介護施設を含めたインフラを間違いなくつくります。

高齢者自らの意志によって移住させようとして、田舎暮らしの業者がその地域に介護施設をつくったとしても、こうした介護施設の運営を維持できるだけの要介護認定者がいないと成り

立ちませんから、そうでもしない限りインフラはできません。

このＣＣＲＣ構想と厚労省が考えている、団塊世代が75歳以上になる２０２５年を目途に、重度な要介護状態になっても住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい、医療、予防、介護、生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムとが合致すれば、日本は何とか介護保険制度や医療保険制度を継続できる可能性はあると思います。

しかし、ＣＣＲＣ構想にも翳りがあります。今年の２月15日に放送されたＮＨＫの『クローズアップ現代』は「高齢者の〝大移住〟が始まる⁉～検証・日本版ＣＣＲＣ構想～」がテーマでした。

６年前、新潟県南魚沼市につくられたＣＣＲＣは１５０億円かけてつくられました。低迷する地域経済を再生するため、国が交付金で支援するＣＣＲＣに望みを託していました。すでに施設の建設候補地を選定。都会の元気な高齢者４００人を呼び込む構想を描いています。南魚沼市のＣＣＲＣの拠点となるのは、高齢者が生涯学習できる大学です。そこを中心に、住宅・介護施設などを整備する構想で、７億円以上の経済効果を見込んでいて、東京の大手建設会社が名乗りを上げたそうです。

移住に興味を持った男性が、東京からやって来て、商社マンとして培った英語力を生かし、留学生に日本語を教えたいと考えていると語っています。以下は『クローズアップ現代』番組公式サイトからの引用です。

「しかし、地元の介護施設の状況を調べに来たときです。ベッドが足りず、大勢の人が入所待ちしていることを知りました。

移住を検討する男性

『ここに入るのは、ウェイティングリストが？』

施設担当者

『はい、そうです』

移住を検討する男性

『なかなか入れない？』

男性は、介護が必要になったとき受け入れてもらえるか、不安を感じました。

移住を検討する男性

『介護施設も見せてもらったが、ベストなのかどうかよくわからなくて、もうちょっと勉強したい』

高齢者が安心して暮らせる仕組みを今後早急に作らなければならないと、市の担当者は考えています。

南魚沼市企画政策課　清水明課長

『不安の解消というか、払拭（ふっしょく）がないと前に進められないと思う。それを意識しながらＣＣＲＣの理想的な形を求めていきたい』」

やはり体が弱ったらと考えると、なかなか踏み切れないようです。

新しい支え合いの形をつくるために

今から20年前に福岡県朝倉市に全国に先駆けて開発されたＣＣＲＣ・美奈宜（みなぎ）の杜。

当初の総事業費は３００億円。戸建ての住宅街、住民の交流の場、コミュニティセンター、ゴルフ場などをつくる計画でした。

この町で長年、区長を務めてきた前田幸保さん（79）は３０００万円の家を退職金で購入したそうです。

「何でもそろっているから安心して住める、ユートピアという気持ちで過ごせる町という雰囲気があった」

と思っていたそうです。

しかし、町の姿は計画とはかけ離れたものになっていきます。以下『クローズアップ現代』より。

「当初、１０００人と見込まれていた入居者。実際には、２００人しか集まりませんでした。住み慣れた土地を離れて移住する人が、思いのほか少なかったのです。

その結果、開発業者の経営が悪化。

住民が交流するための多目的ホールやフィットネスクラブなど、老後を生き生きと過ごすた

めの施設の建設が中止されました。町が出来て10年。別の問題も浮上します。
介護を必要とする住民が増え、ヘルパーが不足。十分なサービスを受けられない事態に陥ったのです。
安心して老後を過ごせない。町を去る人まで現れるようになりました」

やはり心配は、介護が必要になったときどうなるかでした。
多額の資金を投入して大規模なＣＣＲＣ施設をつくっても、その人たち全員がずっと健康でピンピンコロリでいくわけはないのです。
要支援や要介護にならないに越したことはありません。しかし、その時のためのシミュレーションをしておくことは、移住の際の必要最低限の心得ではないでしょうか。
いろいろ書いてきましたが、私はそれほど大規模施設をつくろうとは考えていません。先程来申し上げている高齢者の循環型コミュニティを笛吹市で実現したいと思っているのです。
具体的には、移住してきていただいた方にも、要支援、要介護が必要な方の支援をお願いできればと、考えているのです。
例えば、そうした方の買い物をしてあげる。駅に行くときに車を運転していただく。独居のお年寄りの話し相手になっていただく。車椅子を押して散歩に連れ出してもらうなど、いくらでもあると思います。
その際は、完全ボランティアではなく、些少ですがいくらかお支払いするようなやり方を考

えています。

もちろん、移住する際にすでに要支援・要介護の方についても受け入れることができます。

そうやってコミュニティの間で支援し合い、自分がそういう立場になったら支援してもらう。そうした循環型社会ができ、そうしたモデルが日本中にできることが私の願いです。

新しい支え合いの形をつくり、それを支えることで地域が活力を帯び元気になっていく。

そういう形をつくっていくことが今、大事だと思います。それが私どもの理念でもあります。

幸い、先ほどご紹介した中村悦子さんのやっていらっしゃる「地域福祉サポート」では「絆　花鳥の家」「絆　岡の家」という介護事業をやっています。

私どもと連携して、介護が必要なときはいつでもお願いできるようになっています。

また、お一人で暮らしている方には、３６５日、24時間、安否確認機能のついた緊急通報システム「じしんたすけ」をお付けするなど、安心して暮らしていただけるよう万全の体制をとらせていただきます。

笛吹中央病院（山梨県笛吹市）とも連携をとり、緊急の事態にも即応できる体制もとっております。

私たちは老後の安心を販売します

お時間のあるとき笛吹市にお出でいただき、実際にこの美しく豊かな自然を見ていただけれ

ば幸甚です。

ご購入の際は、ご希望の外装、内装、間取りをお伺いして、三次元住宅シミュレーションで確認していただきます。

僭越ですが、お二人でお住まいなら敷地は百坪、家は二十坪程度の２ＬＤＫで十分ではないかと思います。

お二人でしたら２ＤＫでもいいのですが、お子さんが来る、お孫さんが来る、お友だちが来るときのために一部屋あったほうがいいのではないでしょうか。

最後に私の好きな『車輪の下』や『郷愁』を書き、ノーベル文学賞を受賞したヘルマン・ヘッセの『人は成熟するにつれて若くなる』の中の詩の一節を紹介させてください。

「老いた人びとにとってすばらしいものは
暖炉とブルゴーニュの赤ワインと
そして最後におだやかな死だ……
しかし、もっとあとで　今日ではなく！」

私どもが販売するのは、田舎暮らしの快適さだけではありません。老後の安心です。

おだやかな眠りを迎えるまで、安心して幸せな第二の人生を送っていただけるよう、私と社員一同、誠心誠意やらせていただきます。

平成28年11月1日

セカンドライフサポート

株式会社 セカンドライフサポート
[東京事業所] 〒164-0012　東京都中野区本町4-7-14-101　TEL：03-6304-8715　FAX：03-6304-8716
[山梨事業所] 〒406-0831　山梨県笛吹市八代町高家643番地1-B102　TEL：055-287-6628　FAX：055-287-6638
ホームページ　http://www.2nd-life-sprt.com
Eメール　info@2nd-life-sprt.com